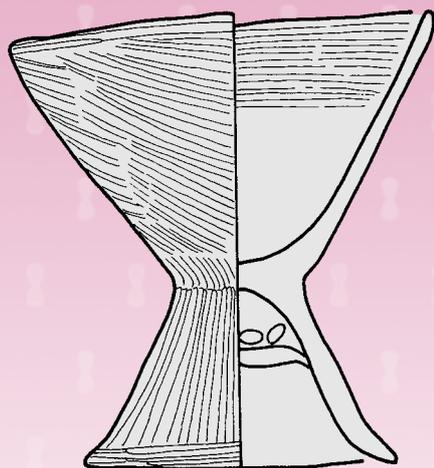


未来への伝承

鈴の高杯



鈴の高杯(原田西遺跡：紫ヶ丘)



鈴の高杯の断面図

高杯は食べ物を盛り付ける器で、椀や皿、鉢に脚を付けた形をしています。弥生時代から使われ、土器などの焼き物や木で作られました。弥生時代終わりごろの日本についての記載がある中国の書物には、高杯を用い、手で食事をしていたと書かれています。

市内で発見された高杯をみると、弥生時代は鉢に不安定な脚がついた形をしています。壺に比べて少ないことから、個人ではなく共用の器として使われたでしょう。古墳時代になると椀のようにやや深くなり、安定した脚が付けられます。古墳時代前半はたくさん発見されるので、個人の器であったと考えられます。古墳時代後半以降は、杯と呼ばれる浅い椀のような器が主流となり、高杯は少なくなり、奈良時代から平安時代の初めごろは、須恵器と呼ばれる灰色をした焼き物で作られました。

今回紹介するのは、市内北部、紫ヶ丘にある原田西遺跡で発見された高杯です。弥生時代終末期のもので、土浦周辺では見られない形をしています。高さは10・6cmで、丁寧に磨かれ、全体が赤く塗られています。この高杯は、普通の高杯には無いある特徴を持っています。見た目ではわかりませんが、横に振るとカラカラという音がします。よく観察すると、脚の内側に円盤状の粘土を張り付けて空間を作り出しています。内部を観察するためにエックス線を当てたところ、この空間に楕円形の玉が2個入っているのが確認されました。この高杯は

鈴の機能をもっているのです。

このような鈴の高杯は、長野県東部を流れる千曲川流域で発見されています。形や色、粘土の質もよく似ていることから、おそらくこの地域で作られたものでしょう。用途としては、音を出すことから日常生活で使うものではなく、神へのささげ物を入れる神聖な容器として、祭祀に使われたと思われま。

この高杯が発見された原田西遺跡は、弥生時代終末期の集落跡です。この頃から古墳時代初めにかけての時期は、日本各地で交流が盛んになり、人々や土器の移動が活発化しました。原田西遺跡からも、鈴の高杯以外に関東南部などほかの地域の土器が発見されています。千曲川流域の土器も、鈴の高杯のほかに、鉢や小型の壺、蓋など、日常生活に使う土器が発見されました。生活道具も発見されていることから、珍しい鈴の高杯だけが交易品として持ち込まれたのではなく、千曲川流域に住んでいた人たちが、これらの土器を携えてこの地に移住してきたと考えられます。

鈴の高杯は、新天地での生活不安を払拭するためのお祓いや、豊穣の祈願など、祭祀の道具として持参したものでしょうか。

今回紹介した鈴の高杯は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で5月末まで展示します。ぜひご覧ください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場(☎826・7111)